

神葬祭

しんそうさい
神道式で行われるお葬式のことを「神葬祭」といいます。

神葬祭は、神職を通じて産土さまに亡くなったことを奉告することから始まります。

一般的に通夜といわれているものが、神葬祭の遷霊祭にあたります。遷霊祭では、亡くなられた方の御霊を遷霊（仏式の位牌にあたる）といわれる白木の「みしるし」に遷します。



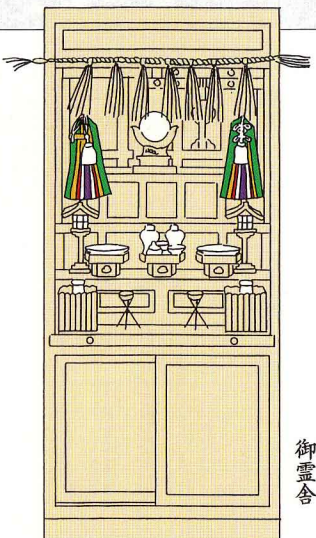
遷霊



遷霊には、遷号（仏式では戒名）が記され（生前の名前の下に「命」）、男は「大人」「彦」女は「刀自」「姫」等が付けられる、しばらくの間は仮御霊舎に安置されます。

翌日、告別式にあたる葬場祭が行われ、次の日には翌日祭が、以後十日ごと十日祭、二十日祭、三十日祭、四十日祭、五十日祭、百日祭が行われます。百日祭までを遷祭といい、一般的には五十日祭をもって忌明け（喪に服する期間を終えること）とされます。神職さんに清祓いをしてもらい、それまで遠慮してきた神棚のおまつりもこの時から始めます。

五十日祭が終わると、遷霊を御横といわれる箱に納め、御霊舎におまつりします。



御霊舎

遷祭のあとは年祭を行います。亡くなられてから満一年目に一年祭を、以後二年祭、三年祭、五年祭、十年祭と行い、その後は、十年ごとに行います。命日には、御横の中から遷霊を取り出し、故人の好物をお供えして、神職に祝詞を奏上してもらいます。遺族や親類縁者が、互いに睦まじく元気で努めている姿を奉告するとともに、いつも守っていたに感謝します。

祖先のまつり

家代々のご祖先のおまつりは、御霊舎で行います。祖先まつりを行うのは、日本では古くから、祖先の霊はこの世にとどまって子孫を守ってくれと信じられていたからです。

祖先まつりは仏式が本来と考えている方が多いようですが、仏教はもともと神や霊の存在を認めるものではありませんから、仏壇による祖先まつりも、こうした日本の伝統的な祖先を敬う心を土台としているのです。

祖先まつりは、神棚まつりと同様に、毎日欠かさず行います。大切なことは、神さまとともに私たちをいつも見守って下さっているご祖先を、親しみを込めておまつりすることです。

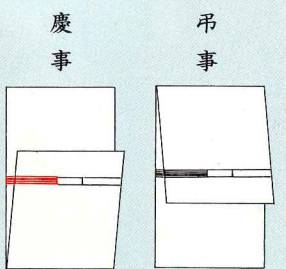
【包みについて】

神葬祭に参列する場合

白黒の水引を選び、表書きは「玉串料」あるいは「御霊前」と書きます。市販のものには蓮の絵がついた仏式用が多いようですが、それがないものを選びましょう。包みの裏の上下のたたみ方は、弔事では上の折り返しを上にして、目を伏せた悲しみの状態を表します。（慶事の場合は逆に、ますます運が上がりそうですよにと、下側の折り返しを上にします。）

年祭に参列する場合の包みも、「玉串料」と書きます。

● 包みの裏の上下のたたみ方



神葬祭に参列した場合のお参りは忍手で



二拝二拍手一拜でお参りすることに変わりありませんが、亡くなられた方を忍び懐く心を表すという意味から、二拍手のときは、できるだけ音を立てないようにします。これを忍手と言います。

また、いつまで喪服を着て忍手でお参りするかは、地方によって多少違いがあるようです。一般的には、一年祭が終わるまでは忍手でお参りするのがよいでしょう。